躍進めざましい〝肥後表〟

―八代郡千丁村にて―

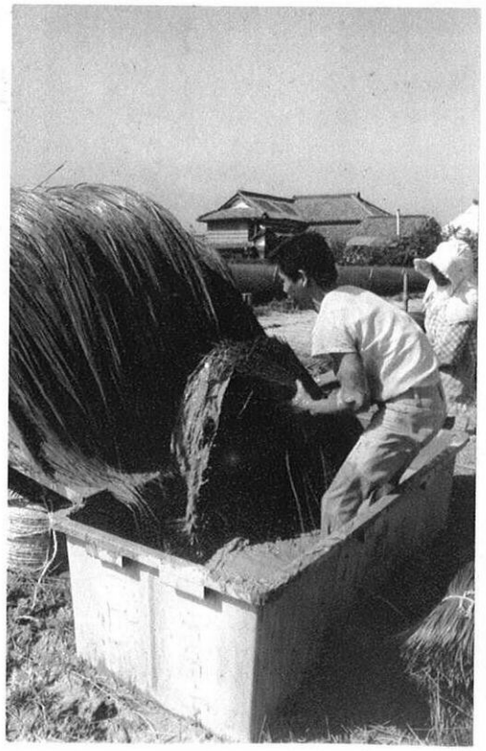
熊本のイ草―肥後表―は、恵まれた自然条件のもとで、栽培面積・生産量ともに年々約二〇%の伸びを示していることしの栽培面積は四五〇〇ヘクタール、畳表の生産量は三〇〇〇万枚に達し、岡山県を抜いて全国一の生産県となった。

県内の主産地は、八代郡千丁村・鏡町を中心とした八代平野の平坦部一帯。さらに最近では宇城・上球磨地方にも広がっている。品質も倒伏防止網の全面普及て著しく向上統一染土の使用で色沢も揃い、加えて自動製織機の導入など機械化も進んで、良質の畳表か量産されるようになった。生産体制の確立と同時に、流通面も農協中心の共販システムにのって活発な取引きが行なわれている。主な出荷先は、東京地域の四〇%を筆頭に、九州・関西・東北地区て〝肥後表〟の声価も高く、進出はめさましいものがある。

▲刈りとったイ草は、まず短いものや枯れたものを取り除く作業が行なわれる　そぐり と呼ばれる

右上・晴天の日は夜明けとともにいっせいに刈り取りが始まる

右中・泥染めしたイ草は、午後三時頃まで天日で乾燥する



左・統一染土による泥染め作業

▼最後に製織機にかけられ"肥後表"が誕生する。

△ここに人あり▽

ふるさとの歴史を編む

★玉名郡三加和町・農業　渡辺　守夫さん

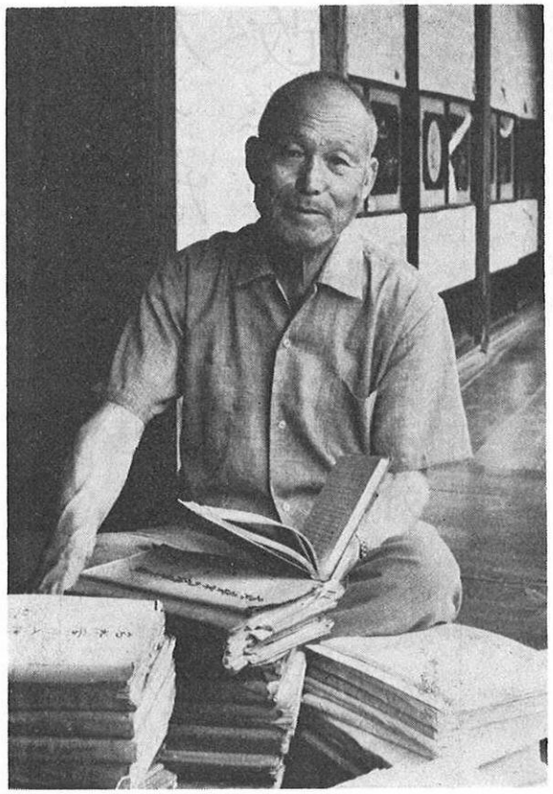
県境の山ふところにある三加和町、この町の読書運動は、すでに定評のあるところだが最近では〝茶の間の読書活動〟や〝親と子の二十分間読書〟など、日常生活に密着した地域活動ということで注目を浴びている。中でも県立図書館の移動図書館（いずみ号）利用グループは七十三に達し、いわゆる町ぐるみの読書サークルは、今や大したものになっている。「百年会」「ともしび会」「ヤング・パワー会」「○△児童館」等とそのネームが示すように、グループの世代も読書傾向もいろとりどりである。

和やかな読書グループ

グループの一つである「さみだれ会」は、古閑部落のいわば向う三軒両隣六人のささやかな読書人の集まりである。配本の責任者は渡辺守夫さん（七五）。配本係りは、「いずみ号」が町の辻々に配達していくグループのための本を一括受領して、それを会員の希望に応じて、読みたい本を配本するのである。前もって注文を受けている本もある。〝この本、読んで見ては……〟と渡辺さんが特に勧める本もある。読んだあとの感想を聞いてみたりすることもある。読書グループのメンバーが渡辺さん宅に集まると話題がはずむ。今までは無関心だった新聞の新刊書案内広告が気にかかるようになった。ベストセラーを読みたいという会員も出てきた。会員とともに本を読むとき、渡辺さんは若返る。〝読書は人を照らす灯であり、生きる勇気を与える〟ということを皆と一緒にかみしめるのである。

資料収集への異常な情熱

渡辺さんは抜群の資料収集家でもある。明治・大正・昭和を生きてきた渡辺さんの人生の断面をそのままに記録した克明な日誌・新聞の切抜、郷土史関係の資料などが書斉にうず高く積まれている。その中で特に異彩を放っているのが第二次大戦当時の従軍日誌（当時は陸軍主計官）で、新聞社や自衛隊などへ、参考文献として再三貸出したこともある。渡辺さんは又、生まれつきの読書家である。多感な少年期に愛読した渡辺さんの人生開眼の書ともいうべき芦花の「思い出の記」や志賀重昂の文明評論集は今もって書架の隅を飾っている。渡辺さんの蔵書といえば、現在約六百冊だが、戦時中は千冊を超えていた。終戦で三加和町に引揚げてからは筍生活の一助として手放した本がかなりあった。惜しいことをしたと渡辺さんはこぼす。本についての語り草はつきない。軍務といっても割合い余暇と公用出張に恵まれた渡辺さんは、旺盛な読書欲をみたすことが出来た。主計官だから転任も多かった。そのたびに千冊程もある蔵書がついて回った。

郷土誌集大成への夢

今、町に明るい話題がある。待望の町の公民館が来春竣工をめざして建設の緒についたのだ。図書コーナや郷土資料室ができる。献本運動を進めて、充実した図書館をつくろうという動きがある。渡辺さんらを中心に、公民館主事の中村さんや山下さんらがその準備を進めている。それと同時に、郷土史編さんの仕事が始まる。〝渡辺さんにひと肌脱いで貰わねば〟と公民館長もハリキッている。渡辺さんは、ある動機があって、町の広報紙に「和仁山物語」を連載執筆したことがある。ドキュメント風の郷土産業誌だが、その詳細で、説得力に富む読物は毎号好評を博した。渡辺さんの残りの生涯をかける仕事の一つとして、町の高齢者たちの昔語りの集大成があるが、その抱負を語る時、若き日の浪漫主義と文明評論がチラッと顔を出す。子供たちは皆結婚して孫が十一人もあるが、現在は妻のよし子さんとの二人暮し。渡辺さんはきょうも柔和なまなざしで古い資料に目をとおすのである。